

新渡戸稲造の武士道

先号の藤尾秀昭、近藤建両氏の文章に触発されて『武士道』を読み直した。最終章に「武士道は一の独立せる倫理の掟としては消ゆるかも知れない。しかしその力は地上より滅びないである」とある。著者の予言は憲法改正や武士道に基く道徳教育が行われれば叶うかもしれないが…。

ケネディが作った鷹山ブーム

「国家がみなさんのために何が出来るかを問わないでほしい。みなさんが国家のために何が出来るかを問うてほしい」。

昭和三十六年（一九六一）一月のジョン・F・ケネディ大統領の就任演説の一節である。この第三十五代アメリカ合衆国大統領は世界中から注目され期待されたが、二年後の十一月に暗殺された。世界を落胆させた。

そのケネディがインタビュに答えて、「尊敬する日本人は上杉鷹山、私は鷹山から多くを学んだ」と言った。

当時鷹山の研究書や専門書、それと娯楽本位の小説はあったが、日本では忘れかけられていた。学生だった私は名前も知らなかった。もちろん中学高校の教科書にも出ていなかったと思う。

ケネディが言ったということ「それっ！」と鷹山ブームが起きた。雑誌、新聞が採りあげ、テレビニュースや小説が続々登場。テレビドラマにもなり、鷹山がその政策をまねたと言われる直江兼統（上杉家の家老で鷹山より一五〇年前の人）まで脚光をあび、米沢が観光名所になった。

鷹山は倒産寸前の米沢藩を、石門心学の教えを忠実に実行し、儉約と殖産で財政再建して借金を減らした。鷹山は歴史に埋もれた人物のひとりになっていったであろう。

それにしてもアメリカの大統領

に言われて、自国の偉人を見直すとは、いかにも日本人らしく、少し恥ずかしい。ケネディ大統領はなぜ鷹山を知っていたか。新渡戸稲造の『武士道』を読んだからである。『武士道』は明治三十三年（一九〇〇）にアメリカで出版された。新渡戸はこの本を外国人に日本を正しく理解してもらうため英文で書いた。後に英語以外の世界中の言語に翻訳されるが、当初は英文（日本と和文に翻訳されたのは明治四十一年（一九〇八）である。この本はアメリカ二十六代大統領セオドア・ルーズベルトが感動し、知人友人に配って勧めた。以来『武士道』は日本理解の参考書として欧米の政治家や知識人によく読まれた。

ケネディ大統領もこの本を熟読精読したのである。余談だが、世界的に有名なこの本は日本では熟読精読する人が少ない。本を買ったが読み切らずに投

げ出す人が多い。理由は二つある。一つは新渡戸などの思想家や世界の歴史上の人物があまりに多様で、歴史と哲学と文学についての広い知識がないとついていけない。二つ目は英文からの翻訳なので和文（日本語本来の文法による文章）になっていない。いわゆる翻訳調の悪文である。たとえば、「切腹をもつて名譽となしたることは、おのづからその濫用に対し少なからざる誘惑を与えた」（矢内原忠雄訳・省波文庫）。

日本語で言えば、「切腹こそ名譽ある死に方である。この考えが（武士層に）流行して命を粗末にする軽率な切腹が増えた」であろう。日本人が日本語の文章を理解するのにくたびれてしまう。それで本を放り出す。著者は日本人なのだから和文の原本も書き残してほしかった。

また新渡戸は武士道の太い柱を「義」としたが、義は武士にとって君主に対する忠義、国に対する義務であると説いた。ケネディ大統領の「国家がみなさんのために何が出来るかを…」という演説は「武士道」のこの章の影響を受けて生まれたと考えて間違いないだろう。

新渡戸はアメリカで五歳年上の

経宮管理講座 330 染谷和巳

マリイ・エルキントン（後の新渡戸万里子）と結婚した。マリイは夫の考えや行動（思想と風習）の一つ一つについて「どうして？」、「どうしてそうするのか？」と子供のように質問した。夫はその都度誠実に答えた。そうした毎日を送っていたある日、学者から「キリスト教のような宗教がないのに日本ではどうやって道徳を教育するのか」と聞かれた。新渡戸は答えられなかった。この二つがきっかけで新渡戸は自分自身について道徳がどこから来たのか考えた。考えた末に『武士道』にたどりつき、妻や学者の疑問に答えるためには武士道について語らねばならないと思った（序文より）。

そして先号「致知」の藤尾秀昭氏が指摘したとおり、病氣療養中に一念発起して論文『武士道』をた（序文より）。

武士道の二本の太い柱は義と仁である。新渡戸もこの順序で書いている。武士道の淵源は歴史に武士というプロの戦士が登場した時にさかのぼる。

だが江戸時代以前の武士道は全く別のものであった。武士道は卑怯、臆病、偽善を嫌悪するが、戦後時代は国を守るため或いは自分が生き残るために権謀術数を用い、妻や子を人質にさし出しあるいは殺し、父親を捕えて追放したりが日常的に行われた。弱肉強食の世界の中に行われていた。武士層の掟は荒々しく血腥いものであった。

その武士の掟は江戸時代になって磨き込まれ光沢のある玉となった。戦わない武士が平時に自己を律する「道」に変質したのである。この変質して完成した武士道はその後現在に至るまで武士、軍人、政治家、経営者が拠り所とする行動規範 になっている。

現代は義も仁も吹っ飛ばして

明治維新の西郷隆盛などの英傑、乃木希典、東郷平八郎から昭和の軍人たちに引き継がれ、現在の有為の政治家や経営者の精神の支柱になっている。

と言いたいが、先号の近藤建氏の文にもあるとおり、勇氣に裏付けられた義の行動は稀れとなり、寛容や思いやりから発する仁、すなわち武士の情けも瀕死の状態である。

「自分さえよければ」のアメリカ流個人主義が幅を利かせ、家庭内の暴力や殺人が増え、政治家や経営者にも自己抑制できず、欲望のままに振るまう非道徳人が目立つ。人々は欠亡や不遇を我慢する精神をなくし、「俺にもよこせ」「支援しろ」「助けよ」と要求し、聞いてくれないければ「訴える」と叫ぶ。依存心ばかり強くなり、義も仁もどこかに吹っ飛ばしてしまつた。武士道復活の日は絶望的に遠い。